

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 15 日現在

機関番号：32206

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K12316

研究課題名(和文) 婦人科がん術後リンパ浮腫予防のセルフマネジメントを促す包括支援プログラム開発

研究課題名(英文) Development of comprehensive support program to promote self-management of lymphedema prevention after gynecological cancer

研究代表者

佐藤 真由美 (Mayumi, Sato)

国際医療福祉大学・大学院・教授

研究者番号：40375936

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は病院、地域保健、産業保健が連携し、婦人科がん術後リンパ浮腫予防のセルフマネジメントを促す包括支援プログラムを開発することである。本研究の参加者は、婦人科がん患者、両立支援担当者、病院の看護師等、地域の保健師を分析対象とした。

研究デザインは、質的研究であり、インタビューガイドを用いた半構造化面接を実施した。得られたデータは質的帰納的に分析し、婦人科がん術後リンパ浮腫予防のセルフマネジメントを促す包括支援プログラムの構成要素を抽出した。しかし、最終年度は、新型コロナウイルスの影響により臨床適用をすることは出来なかった。本研究の助成金は終了してしまうが、研究は継続して実施していく。

研究成果の学術的意義や社会的意義

がんサバイバーを包括支援をする取り組みは経験したことは無く、また、先行研究も見当たらなかった。このことから本研究の学術的意義、社会的意義や価値は大きい。

地域包括ケアシステムは高齢化社会における高齢者のサポート、慢性疾患患者のサポートを目的にして構築された概念である。しかし、がんも慢性疾患の中に含まれるが、がん患者が利用するには課題がある。そこで、本研究で得られた結果を社会へ提言したい。がんは死因の第1位であるが、治療法の向上により5年相対死亡率は延長している。がんと共に人生を生きるがんサバイバーを支えるための一助にしたい。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to develop a comprehensive support program that promotes self-management of gynecologic cancer postoperative lymphedema prevention in collaboration with hospitals, community health and occupational health. Participants in this study targeted local public health nurses such as gynecological cancer patients, coexistence support personnel, and hospital nurses. The research design was a qualitative research, and we conducted a semi-structured interview using an interview guide. The obtained data were analyzed qualitatively and inductively, and the components of the comprehensive support program for promoting self-management of lymphedema prevention after gynecologic cancer were extracted.

However, in the final year, it could not be clinically applied due to the influence of the new coronavirus. Although the subsidy for this research will end, the research will continue.

研究分野：がん看護学

キーワード：婦人科がん リンパ浮腫 セルフマネジメント 包括支援 プログラム開発

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

婦人科がんでリンパ節郭清術後の患者は International Society of Lymphology 分類では、リンパ管輸送障害はあるが浮腫は明らかではない。また、リンパ浮腫は生涯発症予防対策を実施する必要性が高い。我が国の婦人科がんリンパ節郭清術後リンパ浮腫発症率は文献により様々だが 25%前後の報告が多い(佐藤,2014)。発症までの期間は、数日から数十年と個人差が大きい (National Cancer Institute,2011)ことから、リンパ浮腫予防のセルフマネジメントを長期間実施する必要がある。近年、在院日数の短縮化により入院中にリンパ浮腫予防の十分なセルフマネジメント能力を獲得できない状況で退院する患者が多い。

2. 研究の目的

研究目的は病院、地域保健、産業保健が連携し、婦人科がん術後リンパ浮腫予防のセルフマネジメントを促す包括支援プログラムを開発することである。

3. 研究の方法

研究1

目的：婦人科がん術後患者へのリンパ浮腫予防のセルフマネジメント支援に対する患者の思いを明らかにする。方法：質的研究。調査期間：2017年1月～3月。分析方法：半構造的面接を行い、質的帰納的に分析。結果：研究参加者は5名。以下のカテゴリに集約された。

【医師からの説明は配慮が不足している】、【女性特有臓器喪失に伴う恐怖・寂寥感】、【遠慮や羞恥心から相談することができない】、【子宮がんについて相談できる場所や人について分からない】、【術後の変化・リンパ浮腫発症への不安】、【リンパ浮腫になるという心配をしていない】、【日々のセルフマネジメントを前向きに実践する】、【職場の人に子宮がんで治療したことを知られたくない】、【理解ある職場への感謝】であった。考察：婦人科がん患者は、医師からの説明に対して理解できていないことを表出できていなかった。これは患者の権利を阻害していると考えられる。医療従事者は、医療者が考える最善ではなく、患者の考える最善の援助をしなければならない。インフォームドコンセントは、医療における患者の人権を保護するために1957年米国で作られた(貴島,1990)。その内容は、患者・家族が病名、病状、治療法を正しく理解し、十分に納得をした上で患者・家族が決断した内容を医療従事者が皆で情報共有プロセスである。残念ながら看護師はこの役割を十分に発揮しているとは言い難い。セルフマネジメントが長期間にわたり実行可能な体制であること。がんと就労については、個人情報の保護に留意した上で、必要に応じて産業保健担当者等の連携について検討しなければならない(佐藤ら,2019)。

研究2

目的：地方銀行に勤務している婦人科がんに罹患した女性労働者への両立支援の現状と課題を明らかにする。方法：質的研究。調査期間：2017年3月。研究参加者：地方銀行の両立支援担当者。分析方法：半構造化質問紙を用いた半構造的面接を行い、質的帰納的に分析。結果：研究参加者は、関東地方にある地方銀行で両立支援を担当する男性1名。以下のカテゴリに集約された。【他者に病気を知られずがん治療を可能とする支援の実際】、【体調に応じた勤務調整・支援の実際】、【婦人科がん患者の両立支援に関わる多職種間連携の問題】、【医学的知識が無いことによる支援の苦悩】、【がんの早期発見・早期治療の希望】であった。考察：婦人科がんは、女性特有臓器であり、子宮頸がんの発症原因の誤解に起因した疾患を公表したくないという思いが強い(佐藤ら,2016)。思いを尊重し、配慮をした両立支援をし

ていた。しかし、両立支援に関わる連携を希望していた。常勤の産業保健医や産業保健師が不在の事業所においては特に情報交換の場を構築する体制の構築は急務な課題である(佐藤ら,2018)。事業場における治療と職業生活の両立支援のためのガイドライン(厚生労働省,2016)等、HPには様々な情報が発信されているが、活用されているとは言い難い。

研究3

目的：病院に勤務する看護師による婦人科がん術後患者への就労支援の現状と課題を明らかにする。方法：質的研究。調査期間：2017年2月～3月。研究参加者：関東地方にあるがん診療連携拠点病院の婦人科病棟・外来看護師退院調整看護師。分析方法：半構造化質問紙を用いた半構造的面接を行い、質的帰納的に分析。謝礼：1000円の図書カード。結果：婦人科がん術後患者に就労支援ができない現状と理由は、以下のカテゴリに集約された。【病院内、職場や地域との連携不足】【看護師が原因による就労支援の困難】【就労支援が実践できない背景】であった。就労支援に向けて看護師が考える課題は以下4カテゴリに集約された。【若い世代にある患者へのアプローチ】【周囲の人の理解を深める】【ピアサポートの体制を作る】【相談体制を整える】であった。考察：看護師は、がん治療と就労生活の両立を意識し、説明を求める患者に対して情報提供をしていた。がん患者は、就労と治療の両立について知りたい(堀井ら,2009)。疾患や治療の正しい理解、知識の向上と周囲からの協力が得やすい環境を検討する必要がある(松本ら,2019)。婦人科がん就労者の約8割は就労を希望している(桜井ら,2009)が、解雇や休息不足の問題がある(木全ら,2016)。これらのことも念頭に置く必要がある。

研究4

目的：保健センターの保健師による婦人科がん術後患者への就労支援の現状と課題を明らかにする。方法：質的研究。調査期間：2017年3月。研究参加者：関東地方にある保健センターの保健師。分析方法：半構造化質問紙を用いた半構造的面接を行い、質的帰納的に分析。謝礼：1000円の図書カード。結果：研究参加者1名、以下のカテゴリに集約された。【婦人科がん患者への支援数は少なく期間も短い】【病院からの説明が分からない為、支援が難しい】【状況や支援に困った際は病院へ確認して行う】【長期に渡る症状との共存の辛さなど、心情を十分には汲み取れていない】【リンパドレナージが出来る機関は少ない上に高価で負担が大きい】【婦人科がんサバイバーは相談しにくい】【気軽に相談できる窓口があると良い】【がん相談支援センターの認知度は低く、活用できていない】【患者のために病院と地域保健、研究者が連携していかなければならない】であった。考察：2025年には団塊の世代が75歳以上になることから、厚生労働省は、地域の包括的な支援・サービス提供体制(地域包括ケアシステム)の構築を推進している。がん治療を取り巻く現状からも地域保健と病院との連携は必要不可欠である。病院との連携構築を期待している。しかし、体制構築には様々な課題があり直ぐには解決できない。個人レベルでは、情報収集を行い、病院と地域保健の連携は実践している。

研究5

目的：婦人科がん術後患者のリンパ浮腫指導に関する退院前と退院後初回外来受診時のセルフマネジメント状況の実態を明らかにする。方法：質的研究。調査期間：2020年1月～2月。研究参加者：関東地方の研究協力施設で婦人科がんリンパ節郭清術をした者。分析方法：半構造化質問紙を用いた半構造的面接を行い、質的帰納的に分析。謝礼：1000円の図書カード。結果：研究参加者1名、年齢50台、病名子宮頸がん。初回：以下のカテゴリに集約された。【リンパ浮腫については配布文書を読み説明出来る】【外陰部に浮腫が有るが、人

に言うのが恥ずかしいため、報告していない】【早く仕事をしたい】【家に帰らないと今後のイメージが出来ない】であった。2回目：新型コロナウイルス感染予防のため電話インタビューとした。以下のカテゴリに集約された。【がんについては今の所問題は無く安心してゐる】【退院後外陰部、臀部、大腿部にリンパ浮腫がある】【仕事、外出後は症状が増強し心配】【医師からは具体的な指導は無く困っている。教えてほしい】【外来は忙しそうで聞けない】であった。考察：初回は、リンパ浮腫について病院から手渡された冊子を確認し、発言出来ていた。2回目は、「リンパ浮腫で困っていたんです。先生は具体的な説明をしてくれない」と混乱していた。病院での説明時期は混乱期に実施することが多く、記憶に残らない。繰り返しの説明は理解に繋がり、セルフマネジメントに貢献できる(佐藤,2014)。我々医療者は、羞恥心や言い出しにくさを慮った関りをしなければならない(佐藤ら,2016)。

4. 研究成果

1) 包括支援の必要性について

患者、病院、地域保健、産業保健すべてにおいて包括支援の必要性を認識していた。

2) 病院(医師)からの説明について

患者は、医師の説明内容を理解できおらず、病院の看護師も懸念していた。また、保健師は、在宅での状況から患者は病院での説明を理解していないと認識していた。医師の説明で理解できない点を補足説明することで、患者の理解度が向上する。産業の就労支援者には直接の報告や留意事項等の説明は特に無いが、業務を行う上での注意点、配慮しなければならない情報を共有する必要性は高い。

3) 相談について

患者は、女性臓器喪失による恐怖や羞恥心により相談しにくい。また男性には相談できず、自分自身で相談を拒んでいた。患者の心情を危機理論(黒江編,2016)等用いて時期に応じた相談・支援を実践しなければならない。病院では相談窓口の周知に取り組んでいる。婦人科がん患者は、地域の保健師に対しても相談しにくいのではないかと推察する。支援ケースは知人であったが、気軽に相談できる関係性は大きな要因と考える。中小規模事業所の担当者は、医学的知識が無く、相談内容を即座に就労支援に結び付けることが難しい。婦人科がんサバイバーである労働者自らが、就労支援担当者に相談することができることを期待している。このことから、患者力を向上させる介入は必要不可欠な要素である。

4) 連携について

全ての患者の連携は難しく、選択基準を検討しなければならない。病院と地域保健、病院と産業保健それぞれ病院がキーとなり連携をすることが必要であることが明確化された。

5) 就労(がん治療と仕事の両立)支援

患者は、他者に病気を言わない・言えないことにより、職場での就労支援を受けられず、不利益になる可能性は否定できない。病院では、産業保健との連携は殆どないが、母子や高齢者について地域保健との連携実績は有る。以上のことから医師や看護師に対し、特に産業保健との連携について情報提供をすることが必要(濱田ら,2016)である。がん治療には多額の費用が必要であり、生きがいのためにも仕事は継続するべきである。産業の両立支援担当者は、労働者への守秘義務、プライバシー保護と就労支援の狭間で苦悩していた。守秘義務を順守するのであれば、他者に閲覧できない個人メールを用いて支援をするなどの配慮が必要なのではないかとも考える。また、就労支援担当者は男性であり、女性からは相談しにくいことも懸念する。人間的に可能であれば、同性の就労支援担当者を配備することを提言

したい。本研究の成果は、病院、地域保健、産業保健が連携した婦人科がん術後リンパ浮腫予防のセルフマネジメントを促す包括支援プログラムの構成要素とする。

本研究の限界

新型コロナウイルスの影響により研究を遂行することが出来なかったことは研究の限界である。しかし、今後も継続して本課題に取り組んでいきたい。

謝辞

本研究にご協力頂いた研究参加者の皆様、研究協力施設関係者の皆様に、深く感謝いたします。

文献

- 貴島政邑(1990) : Informed consent, 東京慈恵医科大学雑誌, 105(2), 215-218.
- 佐藤真由美, 松本里加, (2019) : 婦人科がん術後患者へのリンパ浮腫予防のセルフマネジメント支援に対する患者の思い, 埼玉医科大学看護学科紀要, 12(1), 53-60.
- 佐藤真由美, 足立智孝, 佐藤禮子(2016) : 婦人科がん術後患者の生活支援に係る倫理的課題退院後の電話相談内容からの考察, 日本看護倫理学会, 8(1), 16-24.
- 佐藤真由美, 櫻井理恵(2018) : 地方銀行に勤務している婦人科がん罹患した女性労働者への治療と職業生活における両立支援の現状と課題, 埼玉医科大学看護学科紀要, 11(1), 41-48.
- 佐藤真由美(2014) : 婦人科系がん術後患者の続発性(二次性)リンパ浮腫予防のためのセルフマネジメントを促す介入プログラム開発, 国際医療福祉大学大学院博士論文, 1-127.
- 濱田麻由美, 佐々木美奈子(2016) : がん患者の就労支援, 癌と化学療法, 43(13), 2473-2476.
- 堀井直子, 小林美代子, 鈴木由美子(2009) : 外来化学療法を受けているがん患者の復職に関する体験, 日職災医学会誌, 57(3), 118-124.
- 松本里加, 佐藤真由美(2019) : A 病院における婦人科がん術後患者の就労支援に関する現状-病棟・外来・退院調整看護師へのインタビューより-, 埼玉医科大学看護学科紀要, 12(1), 45-52.
- 木全明子, 眞茅みゆき(2016) : 婦人科がんサバイバーの就労支援状況および就労支援に関する研究の現状と課題, 労働科学, 92(3-4), 42-61.
- 桜井なおみ, 柳澤昭浩, 山本尚子, 他 5 名(2009) : がん患者の就労の現状と就労継続支援に関する提言, 日本維持新報(4442)89-93.
- 厚生労働省, 地域包括ケアシステム
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/
2020.6.3.
- 中医協, 総-2 参考 28.12.14 医療と介護を取り巻く現状と課題等(参考資料),
<https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12404000-Hokenkyoku-Iryouka/0000167844.pdf>
2020.6.3.
- 黒江ゆり子編集, 新体系看護学全書 成人看護学 成人看護学概論・成人保健, メヂカルフレンド社, 2016, 201-204.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 佐藤 真由美, 松本 里加, 佐藤 禮子	4. 巻 1
2. 論文標題 婦人科がん術後患者へのリンパ浮腫予防のセルフマネジメント支援に対する患者の思い	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 平成30年度 埼玉医科大学看護学科紀要	6. 最初と最後の頁 53-60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松本 里加, 佐藤 真由美	4. 巻 1
2. 論文標題 A病院における婦人科がん術後患者の就労支援に関する現状	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 平成30年度 埼玉医科大学看護学科紀要	6. 最初と最後の頁 45-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Mayumi Sato, Aki Muraoka	4. 巻 6
2. 論文標題 Factors influencing lymphedema onset of gynecologic cancer patients-Evaluation of the effectiveness of an intervention program to promote self-management of lymphedema prevention-	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Annual WorldWide Nursing Conference(WNC2018)	6. 最初と最後の頁 128-135
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐藤 真由美, 櫻井 理恵	4. 巻 11
2. 論文標題 地方銀行に勤務している婦人科がんに罹患した女性労働者への治療と職業生活における両立支援の現状と課題	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 平成29年度埼玉医科大学看護学科紀要	6. 最初と最後の頁 41 - 48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 佐藤 真由美
2. 発表標題 婦人科がん術後患者へのリンパ浮腫予防の看護
3. 学会等名 平成30年度ガンプロフェッショナル育成事業国際医療福祉大学（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐藤 真由美
2. 発表標題 高齢がん患者への看護
3. 学会等名 平成30年度大学教育再生戦略推進費「多様なニーズに対応する「がん専門医療人材(がんプロフェッショナル)養成プラン埼玉医科大学（招待講演）」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Mayumi Sato, Aki Muraoka
2. 発表標題 Changes in Quality of Life of Gynecology Cancer Patients after Lymphadenectomy
3. 学会等名 Annual WorldWide Nursing Conference(WNC2018)（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐藤 真由美, 佐藤 禮子, 足立 智孝
2. 発表標題 婦人科がん術後リンパ浮腫予防のセルフマネジメントを促す研究参加への思い-自記式質問紙に記載された研修参加に対する思いの質的分析-
3. 学会等名 日本エンドオブライフケア学会第1回学術集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 足立 智孝, 佐藤 真由美
2. 発表標題 退院後がん患者のQOL支援の現状と課題-諸外国の取り組み-
3. 学会等名 日本エンドオブライフケア学会第1回学術集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 佐藤 真由美, 鈴木 英子, 町田 貴絵
2. 発表標題 婦人科がん術後患者のリンパ浮腫発症とその要因
3. 学会等名 第27回日本健康医学会総会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 高橋 道明, 佐藤 真由美
2. 発表標題 婦人科がん術後リンパ浮腫予防のセルフマネジメントを促す就労支援に関する文献検討
3. 学会等名 第37回日本看護科学学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 佐藤 真由美
2. 発表標題 婦人科がんに対する継続支援
3. 学会等名 平成29年度埼玉医科大学包括的ライフステージサポート医療人育成コース
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	佐藤 禮子 (SATO REIKO) (90132240)	関西国際大学・保健医療学部・教授 (34526)	
研究分担者	鈴木 英子 (SUZUKI EIKO) (20299879)	国際医療福祉大学・医療福祉学研究科・教授 (32206)	
研究分担者	足立 智孝 (ADACHI TOSHITAKA) (70458636)	亀田医療大学・看護学部・教授 (32529)	
研究分担者	高橋 道明 (TAKAHASHI MICHIAKI) (90710814)	亀田医療大学・看護学部・助教 (32529)	